
悲劇 喜劇

吉良 結衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲劇 喜劇

【Nコード】

N4402T

【作者名】

吉良 結衣

【あらすじ】

コスプレ好きな主人公とDS店長とトラブルホスト、その他大勢。主人公の名前は榊ひかきですが、女のコです。逆ハーレム状態なのに気付かない天然具合を描いております。

第1話

秋。

食欲の秋。

「いただきまあ〜すっ」

やっぱり、フライドポテト（細長いヤツ）は最高。これにビールがあれば尚テンション上がるけど、金銭的余裕がないから第3のビールで、我慢。

「榊、コレ飲んでいいんだぞ？」

目の前に突き出された誘惑に負けるワケには！

「要らない」

突き返したビールを恨めしく見ながら、

「惣ちゃん、またトラブった？」

そう言い切って、ポテト食べる。美味い。

「また、とか言うなあ…」

ワタシが覚えてるだけでも…1、2、3、4…4回目だ。

「アフター止めたら？」

ホスト向いてない。

「止めたら、バレた」

バレた？

「何が？」

興味ないけど、聞くだけ聞くか。

「ココに住んでて、オンナがいるって事」

「あ」

マズイ。

「榊」

あーあ…

「…はあい…」

見られてたかあ…

「コレ」

と、渡されたのは新書の山。

「今日中に」

「はい」

見てなかったっ

「落とした写真集は買い取れ」

侮れがたし、店長。

「嫌なら、身体で払う」

シフト表のワタシの欄が真っ黒に。

「嫌だよ…」

どちらも。

「ん？何か言ったかあ？」

後ろ向きでパソコンイジってる店長に。

「いつもドSですねーって言ったただけですう」

あ。何かスッキリした。

ここは、ワタシの職場。古びた本屋。ココに来たら何でも揃ってるくらい本のジャンルはある。なぜなら店長が「探してた本が見つからないなら本屋やる」で始めたから。何てえー道楽店長なんだか。おかげ様で何とか生きてます。それはそれで、感謝。

「はあ…」

でも、もうちょっと優しくしてくれないかなあ？

「今夜は、帰さないぞお」

「純粹無垢なドSだ。」

「コレ、終わったら帰ります」

元カレと何十時間も一緒に居れるほど、神経ズ太くありませんから。

午前7時。

結局、写真集は身体で払う事に…ならなくて、新書の配置にこだわり、勝手に徹夜した。

「はあ…」

大雑把なO型でも、職人気質なのか妙な事にこだわる。

「あ…」

テーブルの上に、置き手紙が。

『 榊へ

雨、降ってたので洗濯物取り込み完了

惣
』

「ありがとう」

洗濯物取り込んでもらったけど、君の修羅場を何とかしようとは思わないよ！

「いただきますあ〜す」

唐揚げ弁当、美味しいっ

唐揚げ弁当食べてて、気付けばベッドで、

「…あ」

寝てた。

「起きたあ？」

目の前で、目を輝かせながらワタシの顔を見る同居人。

「惣、下着までお着替えしたたる?」

「スゴく通気良くなってるんだけど?」

「榊ちゃん、無防備だからさあ〜」

まさか…

「ヤってないよ?」

「その心配じゃない!!」

「写真、撮ったたる?」

何回かネタにされてるから、次は携帯ブツ壊す!! て決めたから、
携帯渡せっ

第2話

仕方なくやるしかない状況に、苛立ちながら惣の尻拭いをするワタシ。

「はぁ……」

でも、相変わらず慣れないこの雑音。

「…帰ってイイ？」

まだ10分も経たないけど、早く帰りたい。

「あ、来た来た……」

アレ、と惣の顔を向いた方向を見ると、

「クルミちゃあ〜ん」

いきなりONスイッチ入った。付き合わなければっ

「初めましてえ〜新人のカグラですっ」

こうして何度惣の常連に頭を下げた事だろう…

たかが同居人。されど高収入の同居人。

今はじっと耐えるのみ。

男装は、慣れてる。

「店長」

でも、二度とやりたくない。金の為なら、やらざるを得ない。

「榊、遅い」

頭直す暇なく、勿論服も着替える暇なく、夜のお仕事のまま出勤したせいか…ただ遅刻した時とは違う冷たい視線を。

「すみませんでしたあ」

一応、頭下げておくか。

「今日は帰れ」

え？

「香水臭い」

消臭剤が微香性だった？

「でも、」

生活かかっているんです。例え低賃金の本屋のバイトでも！

「惣の匂いがする」

あの消臭剤、香水代わりに使っているのだろうか？

「帰れ」

目の前に出された1万円札の束を、

「はあい」

有り難く受け取り、

「イタルさん、ありがとう」

店長を思いっきり、ムギユツとしてやった。

「ああー……」

妙な唸り声うなを上げて、

「いやあ〜ん」

携帯をベッドに投げつける。

先程、疑似恋愛ゲームで破局を迎えた。

カムバック。

マイハニー。

「はあ……」

でも、仕事、急に休みになってすることないからイイ暇つぶしになっただ。

「ちきしょおう」

でも、最後の最期で『イイ友達で…』とか言っなあ！！
はつきり言っあげるのも優しさだ。

「…榊？」

いかん。ドア開けっ放しで意味不明な独り言を…

「いただきまあす」

惣ちゃん、大好き。

「召し上がれ」

ワタシの大好物、エビチャーハンを作ったって事は…

「惣ちゃん、」

「助けてくれたお礼」

下心アリアリな顔を見ながら、エビチャーハンを食べる。

「と、言いたいけど」

「けど？」

食っちまったじゃねえーかあ。

「いや、何でもない」

スゴく気になる。

「何？」

いつもズバズバ言うクセに、今日は控え目じゃんっ

「何でもないって！」

と言って、惣ちゃんはテーブルの上に、新聞紙を置く。

「へえ…」

有名人同士のゴシップ記事が目に残まる。

「榊、コレ」

と、惣の指先を見ると、

「……あ。」

おじいちゃんが死んだ。

椎名 榊。

久々にフルネームで書いたかも。

「連名で書けよ」

出資元が、ワタシの名前の左隣に『神楽坂 惣』と書く。相変わらず達筆だ。

「俺も」

ワタシの名前の右隣に書いたのは、

「店長」「イタル」

今日、本屋は？

第3話

「ご無沙汰しております」

奈々さん、と言つて、若干涙目の母にハンカチを渡す店長。

「奈々さん、ご無沙汰しております」

一礼して、ワタシの顔を見る惣ちゃん。

「奈々さん、お久しぶり」

誰が一礼してやるものかっ

「相変わらず、ね」

目だけ笑つてないその顔も、相変わらずだつて言いたい気持ちをグツと堪えて、

「皆様、お揃いになりましたか？」

その声は！

「ワタル？」

「榊っ」

高校を卒業して以来の再会に、思わずテンション上がってしまったが、

「兄さん、何？」

ハグしようとして阻止したのは店長だけじゃない。

「早く開封して頂戴」

「はい」

母の言葉で、話が進んでる中、皆の死角になつてるのが、ワタシの右腕…惣に掴まれたままで。惣ちゃんの方見たら。

「何？」

改めてよく見ると、惣ちゃんカッコよかつたんだ。

「何でもナイ」

勿体無い事、しちまつたなあ。

「本当にお父様の書いた遺言書かしら？」

母だけが疑いを持った訳じゃない。ワタシも『嘘だろ…』くらいは言いたい内容だった。

「はい。疑うのでしたら、筆跡鑑定を」

「いえ、お父様の自筆だと判るからいいの。それより、」

店長の顔を睨み、

「何故、イタルさんなのかしら？」

母は、納得できないらしい。ワタシですら納得できない内容だ。

『学園は伊達^{だて} 周^{いたる}が理事長となり、椋岡^{むくおか} 奈々は会長となる。但し、椎名^{しいな} 榊^{さかき}が伊達 周と婚姻関係になる事が条件。無理なら学園は閉校』

おじいちゃん、今頃あの世で笑ってるに違いない…

「はあ…」

「どれだけ考えても、

「有り得ん…」

絶対、男になれって書いてあると思ったのに。

「無理…」

店長には子供がいるんだよ？

「ああ…」

おじいちゃん、あなたジョークで遺言書、書きませんでしたか？

「あっ」

そうだ。カップケーキあったよなあ。

ベッドから降りようと振り向いたら、

「そ、そ、そ、そ、惣ちゃんっ？」

惣ちゃんが真顔で、

「榊」

かなりの至近距離で、

「俺、イタルだけには渡したくない」

これ以上は、

「イヤッ」

同居する前に、

「好きなんだ…」

恋愛感情ナシだから来いって、

「ごめん…」

そう言っつて、惣ちゃんはワタシの頭を撫でて、

「あと…」

チューして、

「カップケーキ、食べちゃった」

何ですとぉー！！

「今から買いに行けっ」

あ。思いつきり急所蹴っちゃった。ごめん。ごめん。

「店長、昨日付けで閉めるなら連絡下さい」

留守電に用件を入れて、『話があるからまたかけます』と言ってから切った。

「あぁー」

頭をかかえて、

「無職だ…」

これから、生きてく糧を探さなくては！

「はやつ」

家路に着くと、惣ちゃんが寝グセにボクサーパンツ一丁の姿で自炊。見慣れた光景に何の違和感もなく、

「お疲れ様あ」

早々、自分の部屋に引きこもろうとして、

「神」

来客居たのか…

「店長」

ココにいたのね。

「来月、就任式がある」

元々、目が悪い店長が眼鏡かけてる時は、本気だ。

「おじいちゃんの創立した学園、潰したくないだろ？」

店長の挑発する笑みに、

「イタル、」

自炊中の惣ちゃんが、

「いい加減にしろっ！」

キレた。

第4話

いつの間にか、日暮れが早くなる。
冬。

無職で、独身。

幼い頃に描いてた未来とは、あまりに違うけど、後悔したくないから、今の自分に満足。

そう言い聞かせて、強がって、今まで生きてきたと、弱音はここまで。

さて、何で本屋に？

反射神経、恐るべし。

本屋『S26』の文字が、かすかに残る。
嫌いじゃなかった。

本屋も。

イタルも。

でも、結婚は別物、だろ？

イタルには、まだ幼い子供がいる。
スゴく愛した奥さんの忘れ形見が。
いきなり、お母さんになるのは、複雑。

21で、一生の人生、決められるかあ〜！

おじいちゃんの手のひらでコサックダンス踊らされてる…

あ。何かムカついてきた。

家に帰る…

確か、

「バニーは、黒だ」

就任式の警備配置の件で話し合ってた筈。

「白だろ？」

なあ？ 榊って同意を求められましても…

「黒が…」

白は、膨張色だからあまり着たくない。

「榊、正解だ」

頭ナデナデしてくれたのは、イタル。

「バニーちゃんに、網タイツは必須だろ？」

君達、話がズレてませんか？

「生足がイイ」

惣とイタルが、分かち合う日が来るなら、それは奇跡だ。

だから、話が進まない。お互いの好みをココでカミングアウトされても、困る。

もう一度、散歩行こうかな。

「惣、俺の女にお触りするなよ？」

いや、それを言うなら、『手を出すな』でしょ？

「ああ、思う存分触らせてもらおう」

と、惣ちゃんの手が悪さする前に、

「大丈夫」

安心して帰って、ね？

「榊、ちよつと」

来て。て言うから、惣ちゃん軽く蹴っ飛ばして、イタルの傍に行くと、

「ずっと一緒に」

チユーして、

「居ろよ？」

返事も待たずに、チユー（濃厚な方）をして、

「じゃあ、」

惣、頼んだぞお〜と言つて、帰っていった。

「このムラムラを、頼まれた事にする？」

惣ちゃん、寝ながら見たのね…

「惣ちゃん、消されるよ？」

溜め息吐いて、

「消されてもイイ…」

相当、飢えてる？

「…ああ…腹減った…」

やっぱり、飢えてる。

あんまんの美味しい季節になりました。

「あんまん。あんまん…」

あんまんさえあれば、ご飯がおはぎのように食べれるくらい餡あんが
好き。

「…これで、」
よし。

数週間前に働いていた本屋が閉店しまして、コンビニは高嶺の花となり、スーパーで3個入り（割引してあるヤツ）を買って、

チン！

と、ホカホカのあんまんに幸せを噛みしめる。

「いってきまあゝす」

「いただきまあゝす」

あ。

「いってらっ」

しゃい。

「うん」

何、納得してるんだあ!!

「美味しい」

幸せそうな顔で、ヒトのあんまん食いやがって!

「返せっ!!」

お金で。

「いいよお?」

接近してくる惣を避けながら、

「返してほしいのは、」

お金。

「あんまん!!」

惣じゃないっ!!

第5話

ヒトは、必ず何かしらの壁にぶつかるとして、今がその壁なら、壊してしまえ。

他人になら言える。

その言葉が、ワタシなら…

ワタシなら…

きつとブツ壊してしまう。

一度しかない人生を誰かのレールで生かされてるなら脱線してやる。

あ。

何、買うんだったっけ？

「で、決めたの？」

無愛想に言うので、

「まだ」

まだ決めてないの？て顔で見ってくるから、

「イタルにやるのは」

これ。

「これって…」

見てお分かりの通り、

「萌えの王道」

メイド服。

「DSのイタルに、ピッタリじゃない？」

と、ワタルの顔を見たらもつと不機嫌になってる。

「ワタルにも買ってあるから」

目をキラキラさせ、

「どれ？どれ？」

それは、

「秘密」

皆で集まった時に、

「イヤだっ」

「うん…」

わかった。と言って、

「これで」

ワタルの手は、ワタルの腰に。

「我慢する」

ワタルが近付き、

「榊」

ワタルの視界には、

「好きだよ…」

ワタルの着てる青のダウンコートしか見えない。

「幸せになるんだぞっ」

『苦しい…』

ギブ。ギブ。タップしてようやく放はなしてもらえた。

「じゃあ、今日楽しみにしとく」

いつものワタル、だった。

「黒のガーターに、ガーターベルト」

また、

「白のガーターに、」

無駄にお互いの嗜好を述べてるので、

「それまで！」

止めに入った。

「…榊？」

惣ちゃん、何かワタシに付いてる？

「榊、おいで」

イタルの傍に行くと、

『後でじっくり見せてもらおう』

そう囁きながら、イタルは、ワタシを膝元に座らせた。

「実は」

ジャケットをワタシの太股に被せて、

「執事を雇った」

完全に過去形。それって、事後報告。

「出てこい」

琴子。そう言って、ワタシをギョッて抱きしめる。

走ってくる琴子を、惣ちゃんが壁となる。

「琴子、」

ワタルが、器用にロープで琴子の両手を縛る。

「これ以上近付くな」

と、イタルが言っと、さっきまで喚き叫んでた琴子が、

「わかった…」

素直にイタルの言っうがままになる。

「…何？」

思わず、イタルの顔見たら、

「うっん」

胸がギョッて、

「何？」

原因、発見。

「何でもナイッ」

激しくホールドするなって！

「大丈夫？」

相変わらず、

「ああ……」

アルコール苦手か。

「また、」

そのうち様子見に来るよって言う間もなく、左腕引っ張られて、

「榊、俺と」

気付けば、

「ずっと一緒に居てください」

イタルの上にあった。

「イタル、」

考えさせて。

「今度、子供に会ってほしい」

お願いだから、少し考えさせて。

「ごめん……」

イタルの手が、ワタシの目元に触れる。

「でも、俺……」

ムクツと起き、

「ずっと」

ワタシをハグして、

「お前の味方だから……」

そのまま寝てしまった。

寝息が聞こえる。

やっぱり、先程の会話は寝言だな。

イタル、お…重い…

キャンユーヘルプミー！

第6話

夜分、遅くにプレゼント配ってまあす。
今まで、そして、これからもお世話になるので、お礼と感謝を込めて。

サンタクロス風のワンピースは、ワタルで。
網タイツは、惣ちゃんに。

中のサンタクロス風キャミソールは、イタルへ。

それは、今のワタシの服装。

皆には、毎年恒例のコンドームを。
2倍で。

出血大サービス。

『ありがとう』

と、耳元で囁いて地べたで仲良く寝てる惣ちゃんと琴子の傍に、
プレゼントを置く。

「ふう……」

後は、

「ワタル？」

ソファーで寝転ぶワタルに、

「……ん？……」

今日は特別サービスで、

「神、重い……」

上に失礼します！

「重い……」

機嫌悪く、無反応なワタルに、

「おやすみ」

プレゼントを突き付け、自分の部屋に戻ろうとソファから降りた。

「危機感ないの？」

「つもり、だった。」

「あるよ？」

「少なくとも、ワタルに襲われない自信はある。」

「榊」

両腕掴んでるワタルの手が、太股に。

「その格好に網タイツはナシでしょ？」

「破こうとするなっ！」

「イヤ」

「それ以上は、」

「ごめん…」

「急所蹴っちゃった。」

最後に、

「イタル？」

「貴方に見せたいものが。」

「榊、」

「重い？」

「ワタルと」

「笑顔で、」

「ナニしてたのかな？」

「DS全開のイタルに、網タイツ破られた…」

「あ、網タイツ…」

「高かったのに。」

「何もしてない」

「未遂だもん。」

「嘘つく」には
「また破ったあ…」
「お仕置きです」
「高かったのに！」
「新しいの買ってあげるから」
「壁に向かって、」
「要らないっ」
泣く。イタルになんか絶対見せない。
「ごめん…」
頭ナデナデして、
「榊、」
首筋にキスして、
「ごめん…」
サンタクローズ風ワンピースのボタンを外す。
「イタル、」
「やってる事と言ってる事が、違う！」
「今度、」
必死で抵抗しながら、
「イタルの子供に会う」
イタルの自爆ボタンを押した。
「あ…」
効果テキメン。
「ありがとうっ」
「それは一瞬で、」
「だから、」
「また元通り。」
「イヤだって！」
「まだ、イタルの子供に会うまでは！」

お色直し第3弾。

「おはよう…」

今日は、久々に学生服着てみました。

「浬！」

台所で仲良く惣ちゃんとお料理してた琴子が、ワタシに向かってダイビング。

「おはよう!!」

キヤツチした。

「琴子、」

冷たい眼差しでこちらを見るのは、

「浬に手を出すなって言ったよね？」

イタルで、

「ただのハグだもんっ」

押し倒されてる状態に、琴子が覆い被さる。

「それはただのハグではないっ」

ワタルが、

「『ただのハグ』っていうのは」

琴子を退けて、ワタシを抱き抱え、床に足を置き、私が立ったのを確認してから、抱き締めて、

「これで。琴子のは襲ってます」

頷く惣ちゃんはイタルを指差すので、

「ワタル、」

見ると、

「ハグにしては」

首、手首、腕を回しながら近付いて来る。

「長めだな」

兄弟喧嘩が始まりそう？

第7話

昨日、イタルの子供に会って言ったけど、言ったけど…

今日、会いに行こうって腕を掴まれて、学生服のまま会ったらト
ラウマになる。

でも、イタルは結構、強引で。

見た目、男二人でおてつないで、歓楽街でナニするの？

だから、何人か惣ちゃんのお店に来るヒトと目が合って逸らして
…してる間に、イタルの実家に到着。

後悔はしない生き方するって心に決めただけど、今、会う必要ある
の？

「イタルだっ」

イタルそっくりの子供が走って、

「ママは？」

立ち止まる。

「ママ、は？」

首を傾げる。

「ママは」

ワタシの頭をポンポン叩き、

「これ」

腰に手を回し、右腕でグイッと引き寄せる。

『名前は柊つひ』

と、耳元で囁いて。

「柊、おいで」

イタルは手招きするけど、

「ママじゃないー」

見た目、パパだから固まってしまった。

「ママだ」

いきなり、ワタシの着てる学生服のボタンを外そうとしたので、

「イタル、」

自分でやる。やれますから！と必死で抵抗するワタシに、

『脱がしたい…』

いや、言葉を感情的に言ってもダメだよ？

「いいだろ、」

『昨日、俺のモノになったんだし？』

「自分でやるって！」

今、お子様の前でイチヤイチヤしてる場合じゃないでしょう？

『後で触らせてあげる』

イタルに囁きながら、カッターシャツから見えるサラシを一気に取る。

「ママだっ！」

ワタシの元に走って来る柊に、

「ストップ」

対抗意識？

「さあーかあーきいー」

甘えた声で、

「お触りはあー？」

て、言いながらすでに手が、両手が、サラシの中に入ってます。

「イタル、」

遊び疲れてスヤスヤ眠る柊が、起きる。

「起きないって…」

必死に、イタルにお触りされないように抵抗する。

「起きないから…」

ね？って、可愛く言ってもお触りはダメ！

「ケチ」

柵の隣に寝転がり、

「榊、」

寝返り、

「お触りしなかったなあ…ああくしたかったなあ…」

往生際悪いイタルに、

「お触り1分1000円」

ジャケットから財布を取り出し、

「イタル、」

「はい」

万札の束をワタシに。

「冗談だよ？」

目の前にいるのは、

「いっぱい楽しませてもらうから」

DSのいやらしいイタルで、

「兄さん、」

ワタルが書類片手に、

「書き直して」

書類が落ちる。

「はあい」

ワタルと目が合ったはずなのに、

「榊？」

シカト？

「ん？」

何か言い様のない感情が込み上げて、

「イタル、」

どうしたの？て言う前に、イタルの顔が。

「ただいま……」

と言ったところで、惣ちゃんはお仕事か。

「おかえり」

「幻聴？」

「疲れた……」

玄関の鍵かけて、振り返ると、

「おかえり、榊」

惣ちゃんっ

「そ、惣ちゃんっ」

驚き過ぎて、コンビニで買ったヘルシー和風ハンバーグ弁当を落としてしまった。

「あ」

それと一緒に買った生キャラメルプリンが転がる。

「はあ……」

落ち込むワタシに、

「榊、」

優しく頭を撫でて、

「そういう事もある」

いきなり、

「惣ちゃん？」

お姫様抱っこになってますけど？

「こっぴつ事もある」

惣ちゃんの部屋に向かっているのが分かったので、

「ないっ」

ジタバタして

「絶対？」

うーん……

「ご飯食べてから考える」

ワタシを降ろして、

「じゃあ、また網タイツ履いてくれる？」
あ。

「破れたからナイ」
イタルに破かれた。

「イタルでしょ？」

一応、違つと横に首を振る。

「惣ちゃん好きな白のメイドさんになってあげる」
だから、ご飯食べさせてください。

第8話

白いブラウスから透けて見える白いビキニは、ポロツと見えそっ
なモノで…

白のミニスカから見える白いガーターベルト。

惣と約束したから。

見せるだけだから。

イタルに知られてもいいんだけど…

「榊、」

冷ややかな目で、

「いつから惣に」

上から下まで凝視して、

「媚びてるんだ？」

明らかに、

「媚びてない」

「媚びてる」

キレてる。

「榊は、」

自炊しながら、

「約束守っただけ、だ」

相変わらず、寝癖にボクサーパンツしか履いてない惣ちゃんは料
理に集中。

「イタル、」

ソファーに座ってるイタルの隣に座って、

「惣ちゃんに妬いた？」

イタルの膝に頭を乗せて、

「うん」

イタルの顔を見ると、

「榊、」

『俺にだけ見せるよ…』

軽くチユーして、

「お仕置きです」

ワタシを持ち上げる。

「イヤッ」

イタルのお仕置きは、さておき、

「まだ、惣ちゃんに見せてないっ」

惣ちゃん、見て！

「また今度、イタルのいない時に」

中華鍋を回しながら、

「しようね！」

無邪気に笑う。

やってません。

本当にやってません。

ご主人様、ワタシは無実です。

ドSのイタルに言ったところで、ますます調子に乗るから、言わないでおこう。

今日は、

「タイちゃん、」

コスプレ服オーダーメイド店『はっさく』に、

「イタルが黙るくらいにヤツを！」

1人で来店。

「榊、お前に色気が足りないだけ」

ワゴンセール準備をしながら、

「何なら、」

黒縁眼鏡が一瞬光り、

「教えてあげようか？」

ワタシを見て、

「まだ、準備中だし」

近付き、

「ね？」

と、いきなり紫いろのフリースのジッパを下ろす。

「タイちゃん、」

下着着けてないのに。

「こういうトコは、相変わらず『天然エロ』だな」

まずは…と、めっちゃめっちゃ透けてるブラを勝手にフィッティング。

「後は、」

デニム（ストレート）を下着と一緒に下ろして、

「コレで」

ブラと同じくめっちゃめっちゃ透けてるパンツは、紐で横から着脱出来るので、これもまた、勝手にフィッティング。

「服は…」

訳アリワゴンセールの商品から取り出したのは、

「王道中の王道で」

体操服。

「迫ってみなさい」

しかも、ブルマ。

足取り重く、

「ただいま…」

居候先に到着。

「おかえり」

ソファーに寝転がる惣ちゃんが見える。

「相手してあげようか？」

「やっぱり、」

「遠慮する」

今まで撮ってきたエロ画像を見てる。

「イタルのモノだろ？」

携帯電話を胸元に置き、

「そうなる前に」

ワタシを見て、

「やっておけばよかった」

微笑む惣の目から、涙が流れ落ちる。

「…榊？」

惣にスゴく失礼な事したんだって思ったら、

「ごめん、惣ちゃん」

抱きしめてる。

「惣、」

間近にある惣の顔を見つめて、

「イタルには内緒だよ？」

チューした。

第9話

12月24日。

今日は、イタルの誕生日。

つまり、ワタルの誕生日でもある。

2人にサプライズを計画。

イタルさん、多分キレルでしょう。

ワタルは、多分喜んでくれるかなあ…

「あのさあ」

ベッドに寝転んで、

「いつまでココに居る気なの？」

ワタシを不機嫌そうに見る。

「イタル？」

今日は、駅前で待ち合わせしたよな？

「俺がいるのに、」

起き上がり、ワタシの前に立ち、

「柎は俺じゃなくてもイイのか？」

返事を待たず、チューをする。

『イタルが好き』

だから、

『ずっと一緒にいる』

そう決めた。

「チューで答えるなっ」

「イタルの弱点は、相変わらずずっとトコだな。」

「着替えるから、」

ドア開けて、

「出ていきなさい!」

思いつきり、イタルの背中を押した。

「今から、サプライズ用の衣装に着替えるから待っていて下さい。
ご主人様。」

「どうした?」

「は、恥ずかしい…」

「榊?」

「街中、手を繋いで歩いた事なかったから。」

「平熱だ」

「何でもないから、おでこに触らないで!よりも、見ないで!

「平熱だな…」

再び繋いだ手を、

「もっと他に照れる事があるだろ…」

「ジャケットのポケットの中に入れて、」

「榊って」

指絡めて、

「可愛い…」

「ギョツと握り締めたイタルに、」

「今更、気付いた?」

「もっと寄り掛かった。」

BAR『ROOM』を貸し切って、

「店長？」

イタルとワタルのバースディパーティーを、

「マスター？」

するって…

「榊、帰ろうか？」

「惣ちゃんに」

連絡入れるね。と携帯を探そうとする右手を、

「いいって…」

握り、

『榊が居れば』

ハグして、

『何もいらぬ』

動けない。

「でも、」

ワタルのロングコートのジッパーを下げて、

「榊、前に言っただろ？」

『こういう格好は、』

耳元で囁きながら、

『俺だけに見せなさい』

腰に回してた手が、下に。

「イヤ…」

ミニスカの中に。

「イヤだって…」

誰かの喉音が、

「からだ 軀は、嫌がってないが」

聞こえる。

「いつまで、見てるつもりだ？」

その視線の先に、

「止めない方が、快樂味わえてよかったんじゃないの？」

丁度、真後ろに

「ワタル、」

居るなら居るって…

「榊、」

後ろから、

「スケスケじゃんつ」

抱き締め、耳元で

『欲求不満？』

そう囁くと同時に、ワタシの腰に回したワタルの手を退ける。

「榊は」

「兄さんのモノだけど、まだフリーだよ？」

「あ…」

確かに、まだ婚約を正式にはしてない。

「それでも、」

ワタシの首に、

「榊は」

チューして

「俺だけのモノだ」

首輪を付ける。

「SMシヨット、ゲット！」

いきなり、明るくなる店内…

「惣ちゃん？」

眩しい…

「おめでとう！」

クラッカーの音。

「イイのが撮れたあ〜」

至福のひとときを味わう惣ちゃん顔が見えた。

「惣！」

お前のデジカメ、データごと壊してやる。

「榊、」

首輪、苦しい…

「俺の傍から」

イタルがチエーン引っ張って、

「離れるなよ？」

ワタシの両手をヒモでグルグル巻きにする。

「はい…」

イタル、こつこつコトは2人きりの時にしよう？

『ご主人様』

サプライズ、恐るべし。

第10話

今年は、いるいるあったよなあ…

今日で、住み慣れた惣ちゃんの家とお別れ。

今年最後の日に、大掃除。

腹、減った…

飯、買いに行くか。

「いってきまあゝす」

今日は、奮発して鱒寿司（二段重ね）を買う！

「神、待て」

台所を掃除中の惣ちゃんが、

「エプロンしか着てない」

「あ、」

本当だ…

「下着じゃ寒いよな」

惣ちゃんが、ダイナミックに鍋を落とす。

「服、」

鍋を拾いながら、

「コートだけは駄目だぞ」

凶星を射抜かれた。

「はい…」

元来た道のりを歩くワタシに、

「少しは、オンナだって自覚して下さいね？」

いつも、ボクサーパンツだけで過ごしてる惣ちゃんに言われたくない。

今日のお昼は、

「俺の、は？」

ハツシユドポテトを食べたくなくて、

「自分で焼け」

久々に、惣ちゃんと一緒に食べる…かな？

「榊に焼いて欲しい…」

『キャツ…』

調理中に、

「惣、」

耳元で囁くなっ

「焼かれないのか？」

惣ちゃんの大事なトコロを冷たく見つめると、

「じ、自分でします！」

そそくさとリビングの片付けを再開する。

「惣ちゃん、」

『ありがとう』

これからもよろしく。

「出来たよお」

「はい！」

台所に近付くのは、

「榊、」

惣ちゃんだけでなく、

「言う事聞けないコは、」

ワタシの隣に、

『家に帰ってから』

いつの間にか、

「お仕置き、だ」

イタルがいた。

「今日は、」

用事があるって言ってたよね？

「あ……」

ハグすると見せかけて、

「駄目だった！」

惣ちゃん、シャッターチャンス逃しちゃった？

「曄、」

今度は、

「いい加減、」

下まで

「自覚しろっ」

脱がす気かっ

「これ、俺が買ったヤツじゃない……」

勝手に下着を物色するイタルを無視して、

「惣ちゃん、」

ベッド置いてく。って言おうとして、目の前で下着を物色してるのは、

「おお……」

イタルだけ、ではなかった。

「惣、コレ撮って」

あんたたちは、そういう事に関しては協力できるのかっ

別れは、

「惣ちゃん、」

いつも笑顔で、

「バ…」

「いつでも」

ワタシの頬に顔を擦り寄せ、

「帰って来い」

囁く惣ちゃんに、

「惣ちゃん、大好き！」

思いつきりハグしたら、

「あっ…」

床に、一直線。

「惣ちゃん、」

大丈夫？

「惣ちゃん！」

答えて！

「惣、」

イタルの叫ぶ声で、

『チッ』

目を開け、

「じゃあな、榊」

そう言っつて、

「イタルとお幸せに」

起き上がり、ワタシをイタルの方に投げる。

「榊、行くぞ」

目を合わせてくれない惣ちゃんに、

「あ…」

何か言いたかったけど、強引にイタルが引っ張り、

「痛い…」

何が、言いたかったんだろう？

「榊、」

エレベーターの前で、

「大好きって」

いきなり、

「俺にだけ言え…」

泣くなよ…

「イタルさん、」

腰に手を回して、

「さん付けはナシで」

目は、エレベーターの階数を見て、

「イタル、大好き」

棒読みで、

「お仕置き、長め決定」

言ってしまった。

「楽しみ。楽しみ」

イタルのドS心を全開にってしまった。

第11話

新年早々、スゴく大切なモノを失いました。
イタルにバレたら素でおしりバシバシするだろうなあ…

「榊？」

後ろから

「何、」

胸揉みながら

「探してるのぉ？」

ハグするのは、

「ワタル、」

一卵性双生児の見分け方は、イタルとワタルの場合だと…

「揉むなら」

2人きりでも、ソフトなのがワタル。

2人きりじゃなくても、ハードなのがイタル。

「これくらい強くてイイよぉ」

自分の胸を強めに掴んで、ワタルを見る。

「…痛くない？」

案の定、ワタルは痛そうな顔をする。

「全然痛くない」

ワタルの両手掴んで、何度か胸をモミモミして、

「あ、」

手を退けて、

「榊のそういうト」

『好き』

頬にチューして、

「榊、」

思いつきりハグして、

『本気で好きだから』

また頬にチユーして、

「兄さんに、コレ渡しといて」

ブ厚い書類をテーブルに置いて、今度はワタルの顔が正面からっ

「ダメ？」

思いつきり縦に首を振る。

「ワタル、」

駄目だって！

気分転換に、高校の数ヶ月を過ごしたセーラー服を着用。

「苦しい……」

胸だけ成長？

「揉まれ過ぎ？」

ワタル、愚問です。

「痛い……」

ローキックよりまだ痛くないけど。

「はっさく行き」

次は、

「コレは……」

見なかつた事にしよう。

「俺は好きだけど？」

どさくさに紛れて、

「ワタル、」

持って行くなぁー！

「タイちゃん？」

あれ？

「榊、ココ！」

会計カウンターから手が出る。

「榊、帰れ！」

会計カウンターから見えるもうひとつの手を掴む。

「佐波、営業妨害」

あの…

「ごめんなさい…」

イチヤつくのは、

「タイちゃん、コレ」

プライベートで。

「榊、欲求不満？」

いや、どちらかと言えば満たされ過ぎ。

「俺でよければ…」

言い切る前に、

「間に合ってます！」

断る。

「周哉には…」

落ち込むタイちゃんの頭をナデナデする佐波。

「間に合ってます！」

佐波を抱き寄せるタイちゃん。

『バカップル…』

出直そう。

「ド」？

「榊？」

何処？

「さあーかあーきい」
ん？

「イタル、」

おかえり。

「榊？」

今、捜索中ですので。

「無視か…」

舌打ちと同時に、

「下着にエプロンより」

ブラジャーのホックが外され、

「裸にエプロンでっ」

パンツまで脱がされても、

『お仕置きしてほしいのかなあ？』

今、ワタシが探さなければならぬモノがっ

「あ、」

目の前にあつた。

「ゴミ箱に捨てた？」

指差すのは、

「捨ててないっ」

ベッド付近のゴミ箱。

「榊、」

ワタシの指に、

「もう見失うなよ？」

婚約指輪をはめて、

「うん…」

頬にチューして、

「ただいま」

ハグして、

「おかえりっ」

ハグし返して、

「イタルさん？」

勢い余って、

「イタル？」

押し倒して、両手押さえ付けて、

「優しく、して？」

完全にいつもの逆バージョンで、

「可愛い……」

では、遠慮なく。

第12話

今日は、イタルの理事長就任式。
ワタシは、新居で縛られています。
惣ちゃん、きっとテンション上げて撮りまくるだろうっなあ…
って、早く取らないと！

「榊？」

はい？

「幸せ？」

この状況で聞く？

「幸せなワケない？」

とりあえず、

「コレは…」

撮るのヤメなさい。

「ワタルだなあ…」

この特長ある縛り方は、ワタル以外に居ない。

『このまま』

真剣な顔して、

『襲いたい…』

ハグして、

「榊、」

口に貼ってあるガムテープを剥がし、

「ごめん…」

チューは駄目だからっ！と、手が出ない。

「ん…」

したがって、

「ダメ…」

チユーする。

「…ダメだよ…」

スゴく、優しいキスだった。

「ありがとお…」

また、惣ちゃんに助けってもらって、

「榊、俺まだ諦めてない、よ？」

ワタシの肩を強く抱き締めた。

「ワタシは…」

あの学校の存続を託されて、と言う途中で、

「榊の気持ちは？」

ワタシの両手を握り、顔を覗き込む惣ちゃんの顔を直視せずに、

「ワタシの気持ちなんて言ってるような状況じゃないのっ」

ついでに、肩にある惣ちゃんの手を払う。

「俺はお前を守る」

いつの間にか、お姫様抱っこを…

「何があっても…」

それは、仕事上で。ってわかってるから。

「俺、榊がいなくなるのは嫌だから…」

はい？

「このまま逃げる」

え？

「逃げるって…」

ドコへ?!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4402t/>

悲劇 喜劇

2011年6月15日19時11分発行